

# 生物多様性への取組み

## 1. 基本的な考え方と推進体制

伊藤園グループは、これまで「伊藤園グループ生物多様性保護の基本的方針（制定：2013年3月、改定：2016年8月）」に基づき、生物多様性の保全や自然資本の持続可能な利用に取り組んできました。しかしながら、経済活動等により世界の生物多様性は急速に減少を続けており、その喪失に歯止めをかけ、生物多様性を回復軌道にのせるための行動が求められています。

伊藤園グループの事業は、豊かな自然の恵みの上に成り立っており、事業の基盤であることを再認識し、2023年3月に「伊藤園グループ生物多様性保全に関する方針」へ改定しました。本方針に基づき原材料調達から廃棄に至るまでの事業活動を通じて、生物多様性の保全と回復に向けた取組みを推進していきます。

### > [伊藤園グループ生物多様性保全に関する方針](#)

生物多様性をはじめ、環境・社会に関する課題や対策については、重要な経営課題として、執行役員会の諮問機関であるサステナビリティ推進委員会（委員長：代表取締役社長 執行役員 本庄大介）で検討し、取締役会および執行役員会に報告・審議しています。

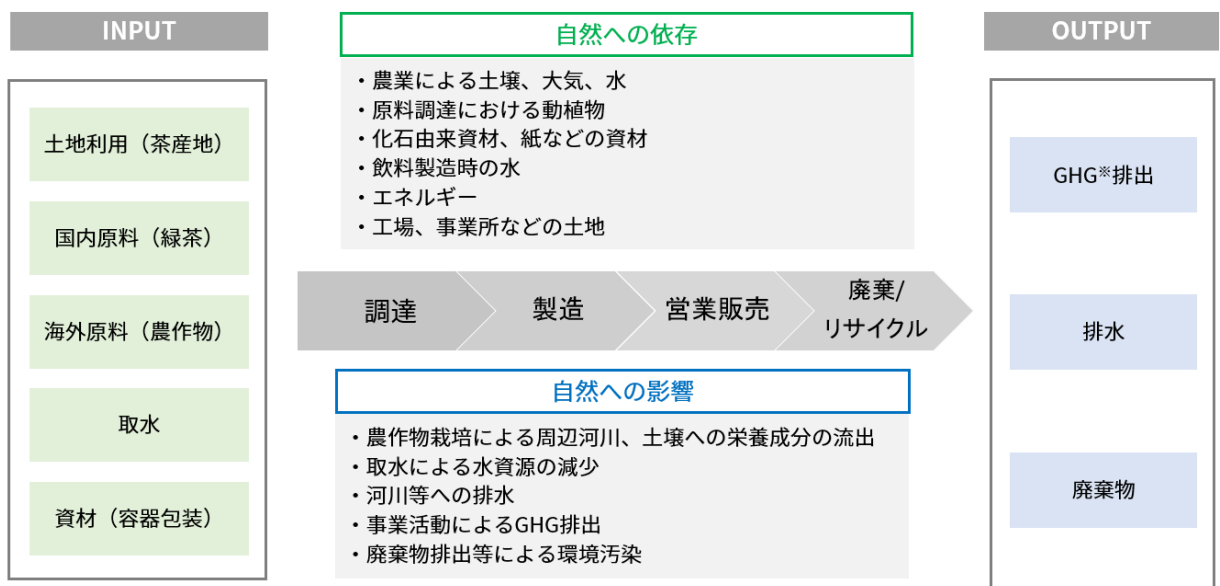
### > [サステナビリティ推進体制](#)

## 2. 伊藤園グループと生物多様性・自然資本との関わり

伊藤園グループの事業活動のバリューチェーン各段階における、生物多様性・自然資本との関わり（依存・影響）について把握し、外部ツールを用いた分析により、優先的に対応すべき自然との関わりの高い項目を抽出しました。

### (1) 依存と影響の把握

事業のバリューチェーンにおける生物多様性・自然資本への依存度と影響度を把握。



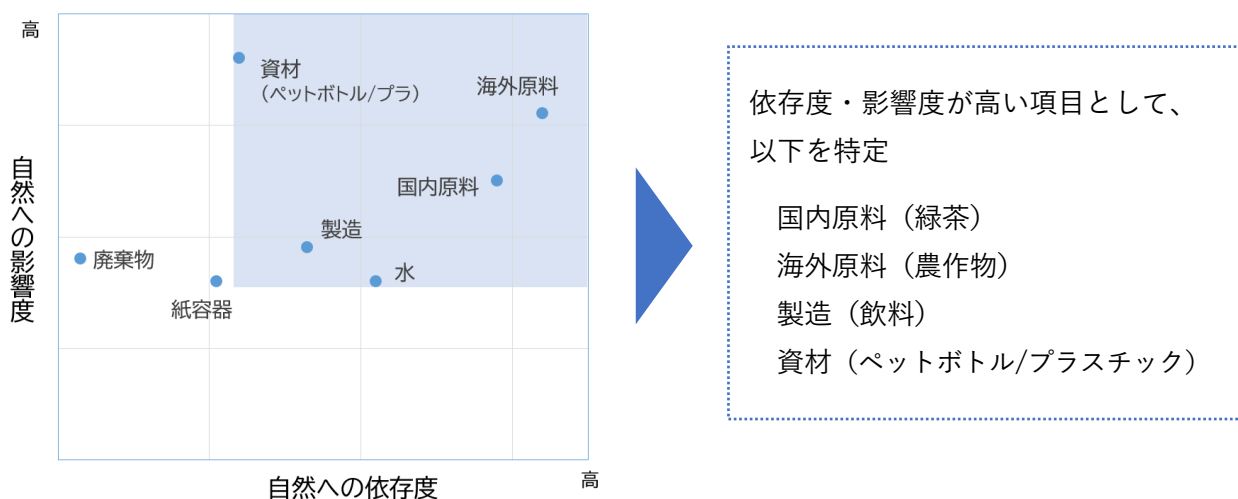
※温室効果ガス(Greenhouse Gas)

## (2) 分析

事業活動の上流である原材料調達、飲料製造において土壌、生物資源、水資源等に大きく依存、同時にそれらに伴う陸域、淡水域へ影響が大きいと評価。

分析ツール：「ENCORE（Exploring Natural Capital Opportunities, Risks and Exposure）」

自然資本分野の国際金融業界団体「Natural Capital Finance Alliance（NCFA）」が開発した、企業の自然への依存や影響の大きさを把握するためのツール。ENCOREの生物多様性モジュールを使用して分析。



## 3. リスク評価・特定

生物多様性・自然資本との関わり（依存度と影響度）が高い項目の中でも、当社主力製品の原料である国内原料（緑茶）と海外原料（農作物）においては、事業活動を行う産地周辺の自然保護地域や、「IUCN レッドリスト」(\*)を参照・把握し、事業活動が生物多様性に影響を与える可能性について、リスク評価・特定に取り組めます。

当社製造工場（委託先工場含む）においては、生物多様性と密接に関わる環境問題のうち、当社グループの事業特性を考慮して、「Aqueduct」(\*)を用いて、水資源に関するリスク評価から取り組んでいます。

今後は、国内のみならず海外の原料調達先や製造拠点まで対象を広げ、水ストレスの高い生産拠点等の評価・特定を実施していきます。

(※) IUCN レッドリスト：IUCN（国際自然保護連合）が公表している、絶滅の恐れのある生物種を調査した包括的なデータベース。

(※) World Resources Institute Aqueduct：世界資源研究所（WRI）が提供している水リスクを示した世界地図・情報。

#### 4. 生物多様性保全の取組み

##### (1) 「茶産地育成事業」における生物多様性保全への取組み

荒廃農地は長期間放置することで植生が偏り、森林化が進み、生物多様性の低下を引き起こすと考えられています。当社は、1976年から取り組んでいる「茶産地育成事業」の中で、農地の生態環境が減衰していく荒廃農地を茶畑へ転換してきました。

また、茶生産者とともに原料茶の品質向上と安定供給だけでなく、環境と共存する茶園経営を推進しています。

今後も環境配慮型農業を推進し、生物多様性の保全と回復に貢献します。

##### [> 茶産地育成事業サイト](#)

##### ◇農薬の使用による環境負荷の低減

病害虫や雑草に対して、物理的防除等を組み合わせることにより農薬の使用量を削減しています。また、病害虫に抵抗性を有する茶樹品種も積極的に導入しています。農薬散布時は周辺環境への影響を最小限にするため、天候や時間帯を考慮して散布しています。

**試験的な主な取組み** ・ 農薬を使用しない、蒸気による防除・除草の導入  
・ 害虫に効果があり、益虫への影響が少ない農薬の使用

##### ◇肥料の施用による環境負荷の低減

肥料の施用に際して、堆肥などの有機質肥料の活用を積極的に推進し、適切な量とタイミングにて肥料を施用しています。また、施肥設計に際しては土壌診断の結果や温室効果ガス低減などを考慮し、適切な施肥設計に継続して取り組んでいます。

**試験的な主な取組み** ・ 茶殻の堆肥化  
・ 窒素肥料の使用量の削減

##### ◇GAP 認証取得による製品の品質と安全性

「茶産地育成事業」では、農業における食品安全・環境保全・労働安全等の持続可能性を確保するため、全ての茶生産者に生産工程管理の認証制度「GAP 認証」<sup>(※)</sup>を取得していただいています。

(※) 食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証。世界基準である「グローバル GAP」のほか、日本 GAP 協会が展開する「JGAP」「ASIA GAP」などがあり、ここではこれら3つの認証のうちいずれかを取得した農園を指します。

##### ◇有機栽培の導入

化学的に合成された農薬や肥料を使用しない有機栽培に取り組み、生物多様性の保全や地球温暖化防止などに貢献します。

◇エネルギーに関する環境負荷の低減

2022年4月より、生産ラインに排熱を再利用するなど温室効果ガス排出量の少ない伊藤園専用の荒茶工場を、埼玉県入間地区で稼働しています。

(2) ステークホルダーとのエンゲージメント

茶生産者や自治体など多様なステークホルダーとの協働により、自然資本の持続的な利用に向けた取組みに関する情報・意見交換を行いながら生物多様性保全への取組みを推進しています。

- ① 「茶産地育成事業」（新産地事業）における茶生産者への説明会を2023年1月18日に実施し、当社の方針や生物多様性を含む環境課題を共有しました。今後も継続的な実施を計画しています。
- ② 当社主力製品の「お〜いお茶」の製造委託先と協働し、工場の水源地付近の清掃活動や枯れ木の伐採など、生態系を豊かにする森林保全活動を実施しています。

[>環境>水資源（水源地の保全活動）](#)

- ③ 47都道府県において「お茶で日本を美しく。」「お茶で琵琶湖を美しく。」による環境保全活動を実施しています。

[>お〜いお茶「お茶で日本を美しく。」](#)

[>お〜いお茶「お茶で琵琶湖を美しく。」](#)